

*H# と 形態構造に応じた cophonology

橋本大樹 (東京大学大学院)

要旨: Gordon (2006) では、自然言語には syllable-template という制約があり、各言語で可能な音節構造は制限されているという主張がされている。この制約の1種と考えられる制約に、Labrune (2002) で主張されている *H# という制約がある。

*H#: The output must not end in a heavy syllable. (Labrune 2002: 105)

Labrune (2002) でも明らかにされている様に、この制約は単純語短縮語形成では非常に生産的に適用が観察され、長音を含む語末重音節に関しても、撥音を含む語末重音節に関しても基本的に禁止されている¹。例²として、以下の短縮語が挙げられる。

e.g. (ファンデー) ション → ファンデ (ギャラン) ティー → ギャラ

一方で複合語短縮に関しては、この制約 (*H#) は長音を含む語末重音節に対しては生産的に適用する一方で、その他の特殊モーラを含む重音節は基本的に禁止しない。

e.g. ファミリー・マート → ファミマ プラス・マイナス → プラマイ ポケット・モンスター → ポケモン

非短縮語に関しても、語末の重音節が禁止されている例が存在する。ただし、長音を含む語末重音節に限られ、厳密に禁止されている訳では無くバリエーションが見られる。(長音の脱落に関しては 薛 (2012) が詳しい。)

e.g. エレベーター ~ エレベータ コンピューター ~ コンピュータ

以上のことを図にまとめると、以下のように語末重音節の容認度に関して形態構造間で非対称性が生じていることがはっきりする。

	語末 R の削除	語末 J の削除	語末 N の削除
単純語短縮	◎	?	◎ (1 語の例外)
複合語短縮	○	△	△
非短縮語	△	×	×

◎: ほぼ全てに当てはまる ○: 半分以上で当てはまる △: 少し観察される

×: ほぼ全てに当てはまらない ?: データが無い

本研究で主張することは、以下の様に形態構造に応じて制約階層の異なる cophonology が結びついているために、形態構造間で語末重音節の許容度に非対称性が生じるということである。

- 単純語短縮の cophonology : *H# >> MAX-N-BT, MAX-J-BT, MAX-R-BT
- 複合語短縮の cophonology : MAX-N-BT, MAX-J-BT >> *H# >> MAX-R-BT
- 非短縮語の cophonology : MAX-N-IO, MAX-J-IO >> *H#, MAX-R-IO

¹: 二重母音を含む語末重音節の例は見つからなかった。また、語末撥音に関しては許容している例 (バーテン) が 1 語存在している。

²: 尚、単純語短縮の切れ目 (基体のどの位置までを残し、どの位置から削除するのか) は橋本 (2012) に基づき分析を行った。

<参考文献>

Gordon, Matthew (2006). *Syllable Weight*. Dordrecht: Foris

橋本大樹 (2012). 「単純語を基体として持つ短縮語形成と韻律構造」『日本語学会第 145 回大会予稿集』, pp.46-51.

薛晋陽 (2012). 「日本語における外来語語末長母音の短母音化」『音韻研究』15 号. 開拓社: 東京

Labrune, Laurence (2002). "The Prosodic Structure of Simple Abbreviated Loanwords in Japanese: A Constraint-based Account." 『音声研究』